

文学の自律性について

磯 貝 英 夫

「週間読書人」(四月四日)を読んでいたら、日野啓三氏のつぎのような文章にお目にかかった。

「私たちはもはや政治に、呪術師も神主も絶対不可謬の指導者もいない。祭政は分離されるべきであるように『文学』からも余計なものを切り捨て、言葉による芸術的表現そのものへの自己変革を行なりべきだと私は考える。それはある意味では敢えて狭く貧しくなることだが(近代画家たちが肖像画や戦争画を描かなくなったように)、しかしそれが言語芸術本来の深さと豊さを獲得する道である。」(「文芸時評」)

毎回トビックに苦勞する時評的文章に、別にこだわることはなにもないわけだし、また、こういう文学観、というよりはものの言いかたは、今日たいへん流行していて、格別の刺激もないのだが、またかと言わざるをえない、こういう発想の流行それ自体は、問題とするに足るし、また、問題にすべきだと思われる。

問題は二つある。こういう論がマルクシズム系統の政治主義的文学理論を相手どっていることは、いまの引用文をすこし注意して見るだけでもあきらかだが、そういう政治主義的見解が今日どれだけの力と権威を持っているかという問題が第一、それから、そうした相対の場を離れたところで、この主張が、自立するに足るだけの、どれほどの実質をそなえているかという問題が第二で

ある。

かつて、村松剛氏が、文学における歴史主義——ヒューマニズム——社会的効用性を否定しつつ、「しかしそれを言うことも、いまはあまりにたやすいことになってしまった。」「マルクス主義的な歴史主義への拒否が、ヒューマニズムへの嘲笑が、いまくらい容易になった時代はない。」となげいているのを讀んだとき(「歴史主義と文学」その一「V」昭三九・一「文学界」)、私は思わず笑ってしまったが、このなげきは、今日の時流を最もよく語っていると云ってよいだろう。

もちろん、政治主義的と言ってもいいような見解が絶えたわけではなく、最近の政治と文学論争などにも、そういうものが強く吹き出ていたが、そこには党派的な感情が動いているらしく、私闘の印象を超えず、全体として、そういう主張が一隅を固持するほかはないというのが、今日の文壇的状况というものだろう。

昔から、文学自律の主張は、拒否的発想において存在となってきたもので、したがって、それは、拒否する相手の力の強さに比例して生き死にする。今日のように、「敵」の力が弱くなり、自律の主張にどんな抵抗も緊張も覚えすむようになれば、それが、ひどく空虚な感じのものになってくるのも、まずは自然の理であるだろう。それでは立つ瀬がないので、論は、相手を求め

て、敵を拡充することになる。現実——政治——思想などの軸にこだわるあらゆる言説が相手どられることになる。アクチュアリティにかけると言った平野謙発言が好餌とされて、文学自律論がにぎわったのも、まだ記憶に新しいところである。

それでは、文学自律論のなかみは、ということになるが、最初の「文芸時評」にもどろう。

「存在するものすべてとあいわたる言語表現の自由で困難な冒険こそ小説と私は考えるからであって」とそこにあるが、私も、ただちにそれはそのとおりだと思う。だが、同時に、「人間、人間関係、社会、政治、歴史といった一連の領域」も、「存在するものすべて」の一部であり、しかも、今日は、そういうものといわたることに、最も「自由で困難な冒険」がありはしないか、と思ってしまう。時評という短距離視野の上ではともかく、すこし身をはなして眺めれば、「人間……歴史」をまるで排除したがつているかのような重点のおきかたは、異様なものとしてうつる。これでは、政治的素材主義のうらがえしと言われてもやむをえないだろう。

また、「文章自体が世界であり宇宙であり自己であり、その謎であり深淵であり亀裂であり実在性であり不確定性であるようないわば特殊な文章であり、そのような特殊な文章の感覚を不断に練磨する作家こそ、他のものの支えを必要としない小説家（文学者ではなく）だという原則」ということばが出てくる。文学のリアリティは文体のなかにしかない、という、昔から言い古るされた観念の言いかえであるが、これも、「文学者ではなく」という限定がどういふ意味のものかわからぬということとは別として、一

応そのとおりだと思う。

なにも小説でなくとも、文章をつづったことのあるほどの者ならば、自分の思念が文体の上にしか実現されないものであることを、身にしみて知っているだろう。ことばは本来抽象物であり、そういうことばによって組み立てられた世界は、おのずから阻害とは異次元の虚構の世界であるほかなく、作品のリアリティがそりしたことはの密度に依存することは、あらためていうまでもない。

しかし、逆に、だから、文学は、現実に関係がなく、現実規制されないなどと言うことになる、話がおかしくなってしまう。そう言わなくても、文学は現実とちがうという強調にとどまるすべての論は、おのずからそうした性質をおびてくるわけで、それは、単純な反映論との対応においては効果をもちつつも、位相的には、それと等価の位置にあると言わざるをえない。

ことばといっても、人間の、現実との長い格闘の上に生みなされてきたものにはほかならず、想像といっても、体験的な知覚のいっさいをつつと全・心的蓄積の上に形成されるものであり、文体といっても、つまりは、精神が世界を切り分ける軌跡である、といったことを考えてみるだけでも、文学の根柢をそれらの上においたところで、それが、いささかも、文学の排他的自律性をあかしたるものでないことは明らかである。

文学は現実でなく、ことばであり、想像であると言われるとき、私たちは、ただちにうなずいて、それからと問う。すると、だから現実とちがうんだと、話もどってしまふ。世の文学自律論のほとんどは、こういうでまぐし合っている。出発点にすぎぬも

のが終点になっているのである。こういう、なかみのない文学非現実論と、一次元的な文学即現実論との対立という単調な構図が、いつまでも、仮想敵をつくってまでつづく風景は、まことに気をめいらせる。

「それから」の課題にはっきり分け入ったものとしては、最近の、吉本隆明著「言語にとって美とはなにか」がある。私には疑問がたいへん多く、そこでおわれている重点を逆転させてみたい誘惑にかられたりもするのだが、とにかく、これは、「それから」の貴重な探索であり、そして、問題ははじまったばかりである。

ともあれ、「文学」からも余計なものを切り捨て、言葉による芸術的表現そのものへの自己変革を行なうべきだ」といった、消去的自律論は、本質論的には、ついにひとつのしゃれにすぎず、情勢論的意味もすでに失われてきていることを、はっきり知る必要があるだろう。

思想・倫理・政治・歴史等々を、すべて、芸術にとって「余計なもの」、つまり、第二義的存在として、文学からどしどしと外していつて、最後に美という形式だけを残すような学もかつてあったが、こういう消去論は、「芸術」という、呪力をもった抽象語によって、ことばによる意味芸術と他の芸術とのあいだの本質的な差異を無化してしまったもので、「文学」というぬえ的用語の廃止を提唱するならば（そのこと自体は大賛成である。）、そのまえに、「芸術」ということばを廃止することがのぞましいだろう。

ことばによる文学は、当然、ことばのおよびうる人間の意識の全領域をうちにつつむ。思想にも、倫理にも、政治にも、歴史に

もわたりあいつつ、ただ、それにとどまらぬというだけのことである。その超えるところだけが芸術としての本質部分で、他は爽雑物だなどという、小学校の算数のような定義は、しゃれにもならない。「爽雑物」がなければ、本質もありはしない。政治はつまらぬが、自然はいい、という風のことなら、趣味の問題である。趣味の有効性を説くのはもちろんいいことだが、それをすべてとするような理論的仮装は、それが力を持つとき、つねに文学を衰弱させる。思想的題材主義も、反思想的題材主義も、その点ではまったく等価である。政治的なその弊害がますます目立ったのは、ただ、それが強制力を持ったからのものであって、他の限定論もおなじことである。

思想の季節の推移とともに、あちこちから文学自律のコーラスが聞こえてくるようになった歴史的経緯そのものは、実は、かならずしも興味がないわけではなく、さらにさかのぼって、その系譜づくりをしてみたこともあるのだが、とにかく、この程度のコーラスがこれ以上つついても、もう格別の意味はないだろう。

その点では、別の発想からだが、福田恆存氏が、「芸術至上主義について」（昭三九・五「新潮」）で、「僕は芸術の自律性などというものを信じてはゐない」と言い、「自律性の過当評価といふ現代病の顕著な症状」を指摘したのは、さすがに、その時勢的明敏さを感じさせた。ただ、そこでとりあげられたのは、もっぱら左翼Vがわの「芸術至上主義」で、いつもながらの進歩的勢力批判の、すこし手のこんだ一形態にとどまっていたが、しかし、それは、当然諸刃の剣となる性質のものである。

「現代の芸術が駄目になったのは、自律性を獲得し、己れの仕

へるべき道を失ったからだ」という観点、それにかかわる、いまの文士は、芸術家でありつつ商人であることをどれだけ意識しているか、という視角は、問題の多いその全体の文脈からとりはずしても、きわめて重要な、根本的課題の提示である。それは、文学自律論がそこから出発しなければならない基点をさし示している。

私は、文学について考えたとすれば、なにより、その効用性を徹底的に問わなければならないと思う。二葉亨の根本の疑いを緊張的に介在させない、どんな作品も論も、つまりはむなし。文学と現実を切断して安心してみたところで、なにがはじまることもないわけで（つまりらぬ虚構作品のままで立往生している私小説否定論などはその一証例であろう。）、私たちは、逆に、文学の内と外との極限を意識的にこわして、そこに、真の緊張的連続を見る必要があると思う。

文学の自律といったことがもしあるとしたら、それは、閉鎖的、限定的、消去的な私たちではなく、他との徹底的なかわりのかたにたちあらわれるものであろう。自律主義などというものは、本来的に空語である。